

令和 8 年度
後 期 日 程

小 論 文

地域科学部

問 題 冊 子

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
2. 本冊子は大問 I ・ II および各問題の後に付した下書用紙の合計 11 ページです。
3. 試験中に、落丁、乱丁、印刷不鮮明、汚れなどに気がつき、解答にさしさわると思った場合には、直ちに試験監督者に申し出ること。
4. 受験番号は、4 枚の解答用紙のそれぞれの指定された場所に、必ず記入すること。
5. 解答は、解答用紙の指定箇所に、正確な、読みやすい字で記入すること。
6. 解答用紙は、必ず提出すること。
7. 問題冊子は、持ち帰ること。
8. 大問ごとに、満点に対する配点の比率(%)が表示してあります。

I 以下の文章は、ジェフ・スペック『ウォークアブルシティ入門—10のステップでつくる歩きたくなるまちなか』（松浦健治郎監訳，石村壽浩・内田晃・内田奈芳美・長聡子・益子智之訳，学芸出版社，2022年，一部改変）の一部です。この文章を読んで，あとの問題に答えなさい。（配点比率50％）

この部分につきましては、著作権許諾の都合により公開しません。

この部分につきましては、著作権許諾の都合により公開しません。

この部分につきましては、著作権許諾の都合により公開しません。

問 1. パーンスタインの作成した地図は、何を明らかにしたのか。本文に即して説明しなさい。
(100 字程度)

問 2. 電気自動車に関する筆者の主張をまとめた上で、あなたの考えを述べなさい。
(400 字程度)

II 以下の文章は、原山浩介「喪失の歴史としての有機農業—「逡巡の可能性」を考える」(池上甲一・岩崎正弥・原山浩介・藤原辰史『食の共同体—動員から連帯へ』ナカニシヤ出版、2008年、一部改変)の一部です。この文章を読んで、あとの問題に答えなさい。(配点比率 50%)

有機農業を考えるうえで、興味深い記事が、2007年3月12日付の『タイム』(アメリカ版)に掲載された。“My Search for the Perfect Apple”(「完璧なリンゴを探して」)と題するこの記事は、筆者の体験談からはじまる。ニューヨークに住む筆者が、食料品店で、カリフォルニア産の有機栽培リンゴと、ニューヨーク州産の慣行栽培リンゴを前に、どちらを選ぶべきか、^{しゅんじゅん}逡巡する。つまり、遠いところで栽培された無農薬リンゴと、近いところで農薬を使って栽培されたリンゴの、いずれを採るのが「正しい」のか、筆者は迷うのである。

一見するところ、無農薬で栽培されたリンゴを食べるほうが、健康のためにも環境のためにもよさそうではある。しかしながら、西海岸で育てられたリンゴを、大陸を横断してニューヨークまで運ぶのに、一体どれだけの石油が消費されるのか。そして、リンゴそのものも、長い時間にわたって冷蔵庫のなかに閉じ込められているうちに、鮮度が落ちているのではないか。つまり、たとえ無農薬とはいえ、新鮮さを欠き、運搬に多くの石油を費やしたリンゴを選ぶことが、果たして良いことなのかを疑いはじめるのである。

ここで提示されている二つの選択肢は、日本流にいうと、「有機農産物」と「地産地消」ということになる。それぞれのメリットは異なる部分があるものの、「環境」や「健康」に配慮しているという意味において、イメージが重なるところがある。そして多くの人びとは、漠然と、「正しそうである」ことや「良さそうである」というイメージに身をゆだねる形で、「有機農産物」や「地産地消」を受け止め、あるいは手にしている。

しかし、両者をならべて、いずれか一方を選ばねばならないとなったとき、「正しい」ないしは「良い」という観念が、^{あいまいもこ}曖昧模糊としていることに気づかされる。そして、私たちが何を求めているのかが、むしろ見えにくくなる。

この『タイム』の記事の問いかけは、じつに巧妙である。この問いを前にして、多くの読者が、「有機農産物」と「地産地消」のいずれがより「正しい」のか、そのはっきりとした結論を求めたがるであろうことを想定し、興味を喚起している。その後、この記事は読者に対して一種の肩すかしを喰らわせる。というのも、議論が一旦は「科学的」ないしは「倫理的」な正しさを求める方向にくもの、最終的にはそうした「正しさ」に収斂するのではなく、^{しゅうれん}筆者がいかに納得のいく買い方をするのか、という話に変わっていく。

(中略)

この『タイム』の記事が秀逸なのは、「客観的」に「正しい」解答を導き出すという、読者がもっとも求めそうな、しかし安易な議論に落ち着くかに見せながら、あくまでも著者自らが納得できる

あり方を探り、そこに落とし込む形で、議論を展開したところである。

『タイム』の記事にみられるような論調は、しかしながらあまり一般的ではない。むしろ、「正し⁽¹⁾さ」なるものを、科学的、ないしは倫理的に、一種の規範として提示するケースのほうがはるかに多い。

健康を題材にしたテレビ番組が流行をみたのは、まさしくそうした、出来合いの「正しさ」が求められているなかにおいてであった。そうした類いの情報は、文字どおり手を変え品を変え、次々と垂れ流される。そして時として、その情報の渦に視聴者が呑み込まれ、特定の商品が品薄になるといった形で、社会現象を作り出す。

2007年1月7日に放送された、関西テレビ制作「発掘！ あるある大事典Ⅱ」において示された納豆とダイエットの関係に関する情報と、これに対する視聴者の反応は、健康情報番組の性格をわかりやすく示していた。この放送では、納豆のダイエットの効用を、捏造されたデータや改竄された研究者のコメントを含む、科学的知見のつぎはぎを用いながら提示した。この放送の影響力は非常に強く、放送翌日から多くの視聴者が納豆を購入し、全国的な納豆の品薄状態が発生する。しかも、そうした一種のパニックが起こっているさなかで、1月16日発売の『週刊朝日』誌上で放送内容に関する疑義が報じられ、1月20日には制作者サイドが謝罪記者会見を開いた。その後、過去の放送分についても問題が次々と発覚し、「あるある」の「納豆」は国内外のメディアを賑わすことになった。

この一連の騒動は、一種の科学事件だった。「納豆」の効用が「科学的」な装いをもって示され、そしてのちに、その内容の「非科学性」が露見したことで、制作会社やテレビ局に非難が集中し、その結果、番組は放送打ち切りとなった。またこの騒動の顛末は、イギリスで発行されている科学雑誌『ネイチャー』において、マスメディアとの付き合いをめぐる世界の科学者に対する警告の意味合いをもって紹介された。

「発掘！ あるある大事典Ⅱ」のような、食と健康にかかわるエンターテイメント色の強い番組をめぐっては、そこで語られる事柄の根拠の脆弱性が以前から指摘されていた。この一件の場合、納豆というきわめて日常的な商品の生産が追いつかなくなるという現象とともに、センセーショナルな形で情報の不確かさが露呈したことが、騒ぎを大きくしたにすぎない。

(中略)

ところで、そもそも「科学的な正しさ」とは、一体何なのか。

食と健康をめぐる情報によって人びとが翻弄されるさまは、「フードファディズム」(food faddism)という外来語で表現される。この用語の紹介者である高橋久仁子は、その定義を、「食物や栄養が健康や病気に与える影響を過大に信じたり評価すること」として紹介し、アメリカ合衆国ではすでに1950年代から論じられているとしている。このキーワードをもってなされる警告は、不確かな情報に踊らされる人びとの動きへの牽制として、たしかに意義が大きいといえる

だろう。

しかし、そうした批判は、氾濫する情報に対して、「科学的根拠」に基づいて疑義を差し挟むという形にならざるをえない。食に関する情報をめぐり、その科学的な誤りを指摘するのはさほど難しくはない。むしろ難しいのは、科学的に正しい情報を的確に示すことである。たとえば遺伝子組換え作物や食品添加物の人体に対する有害性の有無をめぐるのは、異なる「科学的」な見解が並存している。また、人体への長期的な影響を考えた場合、未知の危険因子の存在を疑いはじめると、その是非についての「科学的」な結論は出しにくくなる。ファストフードやインスタント食品、あるいはコンビニ弁当といった、健康に悪そうに見えるものについても、その「科学的」な是非の結論を即座に出すのは難しい。

つまり、「フードファディズム」批判という、いわば「科学主義」的な警告は、「科学」なるものに忠実であろうとするがゆえに、食生活に関わる指針を打ち出すことには不向きである。とくに食品添加物のような論争的なテーマについては、過剰にとらわれるべきではないというメッセージ、ありていにいえば、「素人がむやみに心配してもわからない問題だからあまり気にしなくてよらしい」という優等生的で空虚なメッセージに転化しやすい。

「発掘」あるある大事典Ⅱが「科学的」に論じやすいのは、この番組が科学なるものを濫用しており、その不正を糾弾できるからにすぎない。「納豆がダイエットに効く」という、その手軽さゆえにうかつにも信じたくなる話に対して、その情報がウソであることを糾弾することの小気味良さがそこにはある。そして納豆をめぐる応酬は、私たちとは切れたところで空中戦のごとく展開し、人びとは観客として時に喜怒哀楽を抱きながらこれを見ているにすぎない。このプロセスにおいて、人びとは考えるという行為を求められていない。つまり「発掘」あるある大事典Ⅱという番組と、これに対する「科学的」な批判は、私たちの生活から少し離れたところにあり、見方によっては両者とも同じ土俵にある議論ということになる。

食について考えることは、重要なことである。しかしながら、私たちが受け取っている情報は、何ごとかを考えるための材料であるよりも、むしろ断定口調で、結論めいた食品の選び方や食べ方を示す傾向がある。そして多くの場合私たちは、そうした情報に依存しつつ、あたかも考えているかのようなポーズをとりながら、商品をチョイスしているにすぎない。

あるいはその裏返しで、あらゆる情報に対して懐疑的になり、テレビ番組の情報・店頭を埋める有機農産物・マルチ(まがい)商法において扱われる商品・「おばあちゃんの知恵袋」的な経験知、といったものをひとしなみに黙殺する人も少なくない。

情報が氾濫するなかでは、いずれの態度も、きわめて率直なものといえる。そしてこのいずれもが、情報を吟味し、自ら思考を積み重ね、判断するという営みを放棄したところで成立している。

(中略)

誤解のないように強調しておくが、何もここで、「科学」を思考から排除しようなどと主張しているわけではない。重要なのは、私たちが直面している問題のすべてについて、必ずしも「科学」によって唯一の結論を出しうるものではないということなのである。

私たちは、「正しい」あり方が自明のものとしては用意されえないというこの不安定さを受け入⁽²⁾れる必要がある。そのうえで、この不安定さを逆用して、自ら考え、逡巡するという自由を取り戻す方法を見出さねばならない。

自らの行為の指針や判断を、「科学」や「報道」といったものに預けきってしまう、あるいは氾濫する情報に辟易して考えることを放棄してしまうという、二つの態度に通底する、思考の不自由さに無自覚になっていることに、そろそろ私たちは気づくべきである。

問 1. 下線部(1)について、筆者は、食と健康をめぐる「一般的」な論調、すなわち、「『正しさ』なるものを、科学的、ないしは倫理的に、一種の規範として提示する」傾向を批判的にとらえているが、それはなぜか。本文をふまえて、筆者の考えを整理しなさい。(200字程度)

問 2. 下線部(2)について、「不安定さを逆用して、自ら考え、逡巡する」とは、具体的にどのようなことか。本文中で取り上げられた事例以外で、任意のテーマ・トピックを一つ挙げながら、あなたの考えを述べなさい。(400字程度)

(地域科学部・後期日程)

下書用紙(3)

Ⅱ 問 1

(200字程度)

				5					10					15				20		
																				(100字)
																				(200字)

